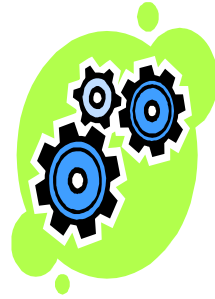


外れた歯車



最近両眼とも白内障の手術を受けた。白内障の手術は病気ではない、メンテナンスだと思っていた私だが、ここ山北の病院では大事をとってか十五日間の入院という。人生のメンテナンスにもなるうかと甘受したのだが、これは大変な経験となった。

山の陰にあるためか、ラジオも携帯電話も使えない。目の手術だから読物はダメとなると、仕方ない、テレビを聴くことにしようかと思うたが、九百分が千円のカードは二日ともたない。こんな時こそ短歌でもひねねばと思うのだが、私は自分がそんな気分になれない未熟者であることを発見したのだった。

夫に英会話のテープを持ってきてもらってかけてみたが、それも三日もするともう結構である。という訳で、読書の出来ない無聊の苦しみを心底味わうことになった。

さすがに介護士さんはそれぞれ丁寧だし、執刀の先生は大ベテランで、術後はすっかり明るい世界が広がって、それは全く有難いことには違いない。

当分はサングラスをかけっぱなしながら、必要にせまられて、車の運転も再開したある日、一通の転居の葉書が届いた。

差出人は、私の父母が最初に仲人を勤めたカツプル、丁夫妻であった。かつては美男美女、才女才女の申し分ない夫婦に思われた二人である。

三十年ほど前に、苦勞して手に入れた筈の玉川上水べりの瀟洒な新築の家から、東京都とはいえ秩父寄りのマンションとおぼしき家への転

居である。丁氏はアルコール漬の人生で、十年ほど前から病んでいた筈だった。私は記載されている電話番号を押してみた。

出たのはたった一人残った末娘であった。長女は夭逝。次女は二十年ほど前に亡くなっていた。長男は去年、まだ五十歳半ばで癌でなくなつたと聞いて、私たちもお悔やみを送つたばかりであつた。

「父は体も口も思うように働かなくなりましたが、頭だけは冴えているようで、毎日読書に明け暮れています。大酒飲みで、子供たちが憎んでいた父でした。」

私は母の面倒を看たいと思つていたのに、すっかりボケが進んで私達の手に負えないので、施設をお願いしているんです。」

あの美人でおしゃれな「子ねえさんがボケるなんて。私は声もなく暫く追憶に浸つた。

丁氏は信州蓼科の山麓出身で、中学校時代に

私の母の実家の隠居屋に下宿していた秀才だった。弁舌さわやかな彼は、外語大学を優秀な成績で卒業し、ある通信社に就職したばかりで、当時世田谷の松原町に住んでいた私達の家にはばらく寄寓していた。

熱海近郊の大きな呉服屋の娘だった「子さんは、女優と言つてもうなずけるスタイルもいい、垢抜けたお嬢さんで、一時女学校の寮監を勤めた母の教え子だった。その後ドレスメーカー女学院を出て実家に戻っていた彼女は、何か家庭の事情で、母を頼つて上京して来たのだが、それも運命であつたらう。

私は二人の隠れ蓑で、井頭公園などでボートに乗せてもらつたりしたのだが、隠れ蓑もいつしかばれて、当然の帰結か二人は雅叙園で目出たく華麗な結婚式を挙げた。

中国語に堪能だった丁氏は、やがて満州国の通訳として活躍、京城で韓国の高等商業の教師

も勤めた。長女を亡くしはしたものの、まず平穩だった一人に、終戦は多くの日本人同様、過酷な道を歩ませることになった。

引き揚げて来た二人は、信州の母の実家に身を寄せた。市役所に隣接していた実家は、強制疎開で壊されていた。隠居屋を表に引き出して、俄か商店として履物の卸を始めた父の仕事で、T氏も手伝った。やがて東京に支店を出すことになって、任されて上京。その後独立して、様々な品のブローカーとして、鉄道の組合などに入れていた。

その間に三人の子供に恵まれた。商品が豊かになると、思うように品物は捌けない。特異な語学の才能を生かす場もなく、もともとの酒飲みが、ますます高じることとなった。

J子ねえさんは美容院を始めようと学校に通い始めた。そして下町に開店したのだが、その店は大繁盛で、人も雇い、有名な女優が鼻直し

てくれる程になった。

しかしそれは子供たちには仇となった。長男はいつかやくざの仲間に入っていた。長女も家には居つかなかつた。私の母は鑑別所から息子を預かったことがあつた。その子は、一日も早くお務めを済まし仲間に戻ることを願って、実に素直に働いていたという。

悲しい話である。ちよつと外れた歯車は、ついに戻ることとはなかつたのだ。いくら波風があつても、夫婦としての二人の絆は固かつたと思つう。しかし子供の目線には、そうは写らなかつた。もう少し賢く、親としての立場を第一にしていたらと残念に思うことである。